

部の高砂・崎の宮等ではカゲシ、荒井ではウマ等といっている。印南郡でも曾根・神吉に於いてその神事に出ている一つ物頭人がある。これは元、祭の中核をなすものであつて、即ちヨリマシといわれるもので、幼くして選ばれて、祭の庭に神の意志を問ひ、村人に神の心を伝える重い役目を果す者であつた。だから今でもこの幼い者は他の者とは違い、乗馬で神事に加つていたのである。

二つには加古郡西部の日岡・浜の宮・崎の宮・荒井等に行われている（中止された所もあるが）オーダン或はオバケサンと呼ばれるものである。これは、頭屋といつてその宮の祭番に當つた家に、村の神を迎えて來て祀るのである。普通家の庭先に芝生の壇をつくつて、ここに神体をうつして祀つてゐるが、これは日本の非常に古い信仰習俗である。村人が共同でその神を祀り、尙、固定した常設の神社建築のなかつた頃の名残りを止めてゐるものである。勿論、神職といつたものもなく、神を祀るべき時には村で選ばれた人が山や丘の杜或いは海浜から神を村里へ迎えて來て祀つていたのである。印南郡でも神吉の八幡神社では以前頭屋の庭前に芝の壇を作つて神を祀つていたことを傳えている。

三つには、所謂アカといつたもので、これは鼻高で通例神事の先頭に立つて供奉するものであるが、加古川流域に於いては特異な様相を示している。これなども、今は女性に敬遠されているが、元はこのような形でなかつた痕跡を残している。畏敬されたことは想像されるが、もつといえれば若い者が神の姿をもつて現はれたことを考へてもよさそうだ。

（筆者は加古川西高等学校教官。関西に於ける民俗学の權威ひとり関西のみにとどまらず全國に名の聞えた篤學家。本稿は「加印タイムス」十月五日号に掲載されたものを、筆者と加印タイムス社との許可のもとにここに轉載）

近藤家と無間の鐘

近藤亀藏の家の傳説を聞きました。即ち次の通り

近藤家の祖、佐用郡の無間むげんの鐘をついて願掛けすれば効あると聞き、当時家の軒下を流れていた川の、流れのある限り、と祈つた処、家は榮え続いたが、ある時の洪水に流れが変り、ついに家運没落するに至つた、と。

これは近藤家の近隣から嫁入して來ている老婆の話であります。〔森 俊秀〕